

## 袖ふれし人(二)

土田龍太郎

袖ふれし人と浮舟の歌に詠めるはそもたれ人を指せりや、この問ひはかばかしくは答ふまじけれども、一たびだにも勘へでやみなむはいともなほざりならまし。

われをひたぶるに戀ひてやまぬ薰右大將と匂宮のはざまにありて、いづれをつひのよるべとも頼みがたく、さはれ中空にてやみぬべくもあらず、かくてはいかにも世にありはつまじければ、おきどころもなくなれるおのがうき身を宇治川に沈めてむほかすべなしと思ひ定めぬる浮舟の心の内、すでに浮舟卷の末つ方よりおほよそ測り知られぬべけれども、この卷の終りはただ

なえたる衣を顔におしあててふしたまへりとなむ

とばかり記してとぢめたり。

浮舟の宿を出でて行方知れずなりぬるは、この同じ夜、人の寝しづまりて後のことにてもやありけめども、作者文の表にてはこのこといささかも述ぶることなし。

續く蜻蛉卷には初めに

かしこには人々、おはせぬをもとめさわけどもかひなし。物語の姫君の人に盜まれたらんあしたのやうなればくはしくもいひつづけず。

とのみ記してやみぬるはいともうちつけにて、讀むにうたてあいなき心地さへそふめり。かかるところ世のつねの作者ならませばおのがさかしらにまかせてこちたきまでに言多く説きなさずはよも心あかざらまし。さるをただ女の失せぬることばかり述べてほかはさながら省きてやみぬる紫式部の筆のはこびげに心にききことよなし。かかる省筆の巧みこの卷のみにてもあらず、ほかの卷々の内にもここかしこ見とむるをうべし。

されば宇治の隠れ里よりあくがれ出でにし後の浮舟の身の上のこと作者の語りそむるは蜻蛉の卷にはあらでそれに續く手習卷の中なれば、讀むものここに至りてぞはじめて浮舟のつひに小野の尼公あまきのみに隠まはれしまでのことゆゑつぶさに知るをうべき。

横川のわたりに住みけるながしの僧都、初瀬詣の歸るさ、夜ありきの道すがら宇治院といふところにて、髪長き女の白き衣に紅くれなゐの袴著て大いなる樹に寄りて泣きゐたるに出で合ひたり。あやしきことただならず、變化へんげなりやにも見えたれども、これぞげに失せにし浮舟のなれるはてにてありける。とかくありてこの浮舟、僧都の妹なる尼公のもとにて行ひすましつつねもころにいたづかる身となれば、そのつねの住かにひとまづ定まりぬるは、この尼公の營める小野の庵にほかなきなり。

初めは生けるやうにもあらで、川に流してよといふ一言のほかものさらに言はず、いとあやしくあやふく見えければ、尼公は兄なる僧都に請ひて修しゆ法ほふ行はせけり。かくてこの大徳、小野に下りて加持しけるが、そのかひあらたにて、浮舟しふに執しゆねくつきまとひゐたりしもののけ、もとは世に恨みを含める老法師なりしおのが素性を明し、かつは浮舟にたよりをえしことゆゑをもち口説きぬるはてに、この僧に負けたてまつりぬ。今はまかりなむとののしりて、いづくともなく離れ去りけり。

かかれば浮舟いささかうつし心つきややさはやかになりぬれど、老法師おいなど見知らぬ人のみ多き中にてなほいと心細く、ありしこと思ひ出でむとすれどもはかばかしうもえおもほえず、おのが住みけむところもおのが名すらも確かならず、ただ心に浮ぶそこはかとなきあれこれおぼつかなきままに、問はるともなしにたどるたどる語りゆけるさま、手習巻に言長く記せれど、左にはその中より、この世に失せなむと思ひ立ちて後、もののけのごとき男のあらはれしところばかりを引かばことなりなむ。

をこがましうて人に見つけられんよりは、鬼もなにも食ひて失ひてよといひつつつくづくとあたりしを、いときよげなる男のよりきて、いざたまへおのがもとへといひて抱いだくこちのせしを、宮ときこえし人のしたまふとおぼえしほどより心ちまどひにけるなめり。知らぬところにすゑおきてこの男は消え失せぬと見しをつひにかくほいのこともえせずなりぬると思ひつついみじく泣くと思ひしほどに、その後のことはたえていかにもいかにもおぼえず。

ほいのこととは宇治川入水のことを指せり。

この浮舟の問はず語りにつきて鈴屋翁、玉小櫛の中に

浮舟君、身を投げんとていでつるころのさまを浮舟巻のところにはいはずして、ここに至りてこの人の思ひつづくる心にくはしくいへる、いとおもしろき書きざまなり。

と記せるは、げにさることにて、紫式部の心用ゐのつねならぬさま、またここにも見とむるをうべし。

この問はず語りにて宮と聞えし人に言ひ及べれば、夢うつつとも知らぬまに浮舟いづなを誘いざなひけるもののけだつものの匂宮の姿をかりて見えたることばかりはをさをさ疑ひなかるべし。

このころ薫のわたりにさまざまさはり出でて、宇治の浮舟に合ふことは本意にもあらざまれがちになりたり。されば闇夜の中に消えぬるに先立つこといく日かもあらぬある雪のよひ、浮舟を訪おとひしは薫にはあらで匂宮にてぞありける。このとき浮舟を宮みづから舟

に抱き乗せてともに宇治川を渡り、女もまたあへて拒まねば、川向ひなる家司けいし時方の叔父の因幡守の領ずる莊にゐてゆきて、ねもころにあひ語らひて、次の日の夜ふけてのちにぞまた宇治に伴ひ還りける。浮舟巻にてはこのときのことを述ぶるにいとしもおぼめかしからず。句宮にむかへる浮舟さしも心閉すことなくあひむつびつつ一日暮せしさま、その一段の文の表よりあらあらえ伺ひ知るべし。

さればもし浮舟、これより句宮一つ方を頼みて宮のたばかりにまかせて、いづこにてもあれひそかにかくまはるる身となりたらしましかば、これしもつひに一期のさいはひになるまじきにもあらざらまし。世のなみなみの女の上にてこそはさもあらめ。浮舟のかく心輕き女ならむとはたえておぼゆまじければ、句宮一方になびきてやみなむことえあるまじきなり。

袖ふれしの歌口あしたずさまれし朝に先立つある夜ふけまじどろまれぬままに、昔よりのことつぎつぎに心にたどられぬれど、ことには薰と句とのあはひ、をりふしのことさまさまに思ひつづけられてはてしもなかりけるさま、手習巻につぶさに述べたれば左に引きみるべし。

さるかたに思ひさだめたまひし人につけて、やうやう身のうさをもなぐさめつべききはめに、あさましようもてそこなひたる身を思ひもてゆけば、宮をすこしもあはれと思ひ聞えけん心ぞいとけしからぬ。ただこの人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小島の色をためしに契りたまひしをなぞてをかしく思ひ聞えけんと、こよなくあきにたる心ちす。はじめよりうすきながらもどやかにものしたまひし人とは、このをりかのをりなど思ひ出づるぞこよなかりける。

心亂るるままに浮舟のとめどもなく獨りごつこの一段、たどたどしき方なきにあらねば、ただうち見るのみにては文意すみやかに悟りがたかるべし。さるかたに思ひさだめし人、のどやかにものしたまひし人と右にいへるはいづれも薰右大將を指せり。ただ一たびにてもあれ、薰にそむきて句に誘はるるままに身を委ねつることのいとど悔まれて身のおきどころもなくなれるさま、かかる浮舟なほ薰を忘れかねてなほなつかしく慕へることばかりはまぎれなく知るをうべし。

されば浮舟、句とむつびしあひだにも、薰とあはれ交せしをりのこといかでしばしだにも忘るることのあるべきなれば、浮舟の句と薰のいづれ一方にわが身と心を委ねはてむことさらにありうべからず。句も薰もいづれ思ひ捨てがたければ、つひに中空のままにいかにもせむすべ知らに、はてはわが身を宇治川に投げ失ひてむほかなくて、夜ひそかに

夢うつつともなくあくがれ出でぬるは、げに避りがたき成り行きなりといはでやはあるべき。

浮舟の歌に詠める袖ふれし人とは匂なりや薫なりや、ここに再び考へむに、浮舟を誘ひしものへの匂宮のかたちをとれりしことまでこそはまぎれなけれ、これのみにてやがて袖ふれし人は匂宮なりと思ひ定めむはいかにも危ふかるべし。

近き世の註釋のたぐひにても釋きやう一とほりならず、袖ふれし人を匂宮とせるものあり薫とせるものもありいづかたに定まりたりとも知れがたし。鈴屋大人すずやのうしはこの歌のこと玉小櫛にてはなにも記さでやみたるは、袖ふれし人いづれかそれと確めむすがとてはなにもなきゆゑにてもあるべし。

そもこの浮舟といふ人、心深きことたぐひなければ、薫にてもあれ匂にてもあれ、むつび語らふことたび重なるともまことはなにとやらむ祕めたるものなほのこりてあはひへだつるごとくなれば、おもてばかりはなれまさりゆくがにおほゆとも、その魂の奥がかへりていとど測りがたくなりもてゆくめればあやしきことただならざりけらし。さらにまたもののけのことはいかにもあれ、ながめがちにに日を送る浮舟の魂ややもせばあくがれてとりとめがたくなりもてゆくまににあひ異なるくさぐさの思ひのこともごとゆき交ふそのはてに、われとわが心の行へだに尋ねがたく、つひのよるべとわが頼むは薫なりや匂なりやおのれみづからことわりがたきまでに亂れゆくことさへまれならざりしなるべし。

さればふと匂ひくる梅の香にかつてわが戀慕ひし人のこと刹那ばかりわが心にきざせども、その人薫なりや匂なりや、必ずそれとみづからえ定めむいとまなきうちにそのおもかげやがて消えてあとかたもなくなりもやしけむ。もししかりとせば、袖ふれし人薫なりや匂なりやあながちにあなぐらひてもいかがはせむ。されば今はこの問ひごとさしおきてやみぬとも苦しかるまじきにこそ。

東屋から手習の卷々ところどころに載れる浮舟の詠草少からねど、袖ふれしの一首にまされるものありとは思はれず。この一首、幽玄の歌のこよなくめでたき例なること上かみに述べたるがごとくにて否むべくもあらず。

さはれこの一首をめぐるに、歌體の方につきてのみ論あひつらひてやみなばいとしもかたほなるべし。この一首の幽玄體の秀歌となりぬるは、ここにこもれる浮舟の魂の深きことはてしもなきがゆゑにほかならざるべし。捉へんとしてえ捉へぬそこひも知られぬ魂の奥が、ただ刹那ばかりふと垣間見するこの一首、ひとり浮舟のみかは、五十四帖の内に紫式部の祕めおける人と世のくすしきことわりを尋ねむよきついでともなりなむかし。

(令和五年二月二十七日受附)

